

2021年9月26日(日) / 説教者：神谷武宏

説教：「苦難は希望へ、希望は東方から」

聖書：エゼキエル書43：1～9

預言者エゼキエルは、崩壊した都エルサレムに立たされて幻を見せられる。以前、イスラエルの王も民も神を礼拝することを軽んじた。誤った祭儀、偶像崇拜（淫行）を働いたことが指摘されている。さらに強く指摘していることが7、9節にある。「王たちが死ぬとき、その死体によって、わが聖なる名を汚す」「王たちの死体を遠ざけよ」とは、かつての王国が滅びゆく時代に王が死ぬと王の墓石を神殿の区域内に置き始めるということが起きた。王の墓石が神殿に近づき、神殿と並ぼうとしていた。そのことを神の怒りとして表している。人間が神と並んではいけない、神以外に礼拝の対象があってはならない。

神殿の再建ということが40章から記され、神を礼拝することの大切さがメッセージとしてある。苦難の中にあつた人々に、希望のメッセージとして光が灯される。その希望の光はどこから来るのか？「見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から到来しつつあつた」(2節)。これはどこに立って「東」と言っているかという、今、エゼキエルは都エルサレムに立っているのである。そのエルサレムから見て「東の方」とは「エデンの園」があつた方角であり、かつてアブラムが旅をしてきた方角であり、何より捕囚の民として今置かれているバビロンの地、その方角である。「神の栄光が、東の方から到来」とは、捕囚の民へ解放され帰えることが出来るという約束がここに語られている。事実、捕囚の民となって70年後にはイスラエルの民は解放され帰還する。

もう一つ、この「東の方から到来」するとは、「占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来た」というマタイ福音書の言葉を思い出す。この捕囚の民とされた歴史から律法の手紙はまとめられていく。同時に信仰の継承も確実に成されて行く。その証が、キリスト誕生の知らせを持ってきた占星術の学者たちに表されている。この一連の流れにどれほどの慰めが満ちていることか。苦難は希望へ、希望は東方から押し寄せてきた。

戦争で国は滅び、敵国の地に強制連行され、不自由と抑圧の中で生きる生活を余儀なくされ、希望が見出せない状況にあつた民に希望の約束が成されたことは、どんなにか慰めに満ちていたことか。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」(ヘブライ11:1)。その信仰によって私たちがキリストにお会いする恵みにあずかる。(神谷)